

在宅医療のための

Clinician *a* Home

2016 夏号

ナ
ー
ス
に
注
目
!!



特集

訪問看護師の日常 —— 02

Case Report

“看取り難民”を増やさないために —— 08

Dementia Home Care

認知症の人を在宅で支えるための徹底した情報収集と個別的アプローチ —— 12

Close-up在宅医療

医師会と大学が協力して、在宅医療の充実を図る —— 16

家族の肖像 —— 07

For Pharmacist —— 14

One Point 薬物治療 —— 19

もう一つの約束

一般社団法人 全国在宅療養支援診療所連絡会 事務局長 太田 秀樹



「車椅子からベッドに移乗するとき
にずり落ちて、それから腰をいたが
るんです」と在宅患者のマサ子さん
の娘さんから電話があった。「圧迫
骨折かもしれないな」と伝えると、
レントゲン撮ってほしいと希望され
た。骨折を確認したからといって、
治療方法が変わるわけでもない。
痛みを楽にする治療で十分と応えた
が、外来受診させるという。
脊柱はすでに魚椎様に変形し、椎
体の骨皮質は紙のように薄くなって
いたが、左股関節には人工骨頭の金
属陰影がくつきりと描出されている。
実は私が大病院勤務時代に執刀し
た人工関節だ。当時「20年間は使え
るから絶対に大丈夫」と約束した。
その後開業医となったが、彼女は
定期的に受診して術後経過の観察を
継続した。30年来の患者なのであ
る。家族も親戚もいつのまにか私の
患者となり、予防注射や高血圧など
の管理を行っている。約束どおり
人工関節は20年間なら問題なく機

能したが、もはや彼女は車椅子の生
活だ。認知機能も低下した。外来受
診時に付き添っていたスモーカーの
ご主人は、肺がんで数年前に他界
し、伴侶に先立たれてから彼女の性
格は変わった。もともと天真爛漫で
明るい人だったが、認知症が重度化
し少女のように無邪気になった。
往診時には「先生嬉しい、先生嬉し
い」と私の手を両手で握りしめて
泣き始める。情動失禁が目立つの
である。

最近「血糖値も、コレステロー
ル値も気にしないように」と伝えて
いる。好きなものを好きなとき、好
きなだけ食べてもいいこととした。
90歳を超えた彼女の生活習慣病を嚴
密にコントロールしたからといっ
て、これ以上寿命が延びるとは思え
ない。人生に限りがあるのは誰の目
に明らかだ。楽しく今日を過ごすほ
うがいいに決まっている。

娘さんも母親を自宅で最期までお
世話する覚悟でいる。往診のたびに
「よろしくおねがいしますね」と頼
まれる。「大丈夫だよ。人生丸ごと
面倒みさせてもらうから」。これが
もう一つの約束である。

Voice

超高齢社会は疾病概念をも変化させた。

フレイル(虚弱)、サルコペニア(筋肉量減少症)、認知症が象徴するように、
根治困難な兆候と対峙し、生活障害を支える医療が求められている。
だから、地域包括ケアシステムという新たな秩序のなかで
「患者と家族の人生を丸ごと面倒みさせてもらう医療」を目指している。

家族支援
私の流儀

